

SGHを軸にした学校改革

探究学習を通して、
困難に立ち向かう姿勢と
メタ認知能力を育む

変革のステップ

背景と課題

- 積極的に高みを目指そうという意欲を持つ生徒が減少傾向にあった
- 失敗を恐れずに挑戦し、想定外の課題を乗り越える経験を積ませるため、探究学習の導入を図ったが、思うように教師間の理解が得られなかった

実践内容

- 探究学習の推進** 2014年度にSGH(*1)の指定を受け、15年度には知の総合類型の1・2年次に「知の探究」を設置。高いハードルを設定し、生徒が失敗から学ぶ経験を重視した探究学習のカリキュラムを策定した。19年度からは、普通科の1・2年次でも探究学習を実施
- 生徒が探究学習の評価基準を策定** メタ認知能力を高め、振り返りを行いやすくするよう、生徒に探究学習の相互評価に用いるルーブリックの評価基準を策定させることにした

成果と展望

- 困難な状況においても粘り強く取り組む生徒が増加
- 課題研究での生徒の成長を目のあたりにし、教師が探究学習に前向きになった

失敗を恐れずに挑戦する生徒を育成すべく、探究学習に着目

普通科と国際理学科から成る兵庫県立姫路西高校は、140年以上の歴史を持つ学校だ。旧帝大を始めとする最難関国立大学の合格者を毎年出しているが、近年は生徒の進路意識の変化に課題感を覚えていたと、進路指導部長の井上智裕先生は述べる。

「本校のような地域の拠点校であっても、一昔前に比べると、生徒の気質は変わってきています。昨今、真面目で大人しく、いわゆる安全志向の生徒が増え、自分の殻を破って積極的にさらなる高みを目指そうとする意欲に課題を感じるようになりました。与えられ

PROFILE



校訓に「質実剛健・自主創造・友愛協調」を掲げる。2014年度にSGHの指定を受けたのをきっかけに、探究学習を推進するとともに、オーストラリアやアメリカへの研修などを通じた、国際理解教育にも力を入れている。

設立	1878(明治11)年
形態	全日制/普通科・国際理学科/共学
生徒数	1学年約280人

2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大、大阪府立大などに229人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ320人が合格。

住所	〒670-0877 兵庫県姫路市北八代2-1-33
電話	079-281-6621

Web site <https://www.hyogo-c.ed.jp/~himenisi-hs/>

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

たものをこなすだけでなく、自分の限界に向かつて努力することで得られる成功体験を高校生活で味わわせたい、そうすることで彼らの持つ高いはずの潜在能力を引き出したいと考えるようになりました」

そこで、2010年代に入る頃から、授業改善の気運が高まり、教科単位で探究学習を導入する動きが起り始めた。企画推進部長の藪内章彦先生は、当時から振り返る。

「探究学習では、答えが1つではない課題を設定するとともに、納得できる答えが得られるよう、多様な方法を試みます。よいと思った方法でも、実践すると想定外の事態に直



校長

山根文人 やまね・ふみと
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「生徒の持つ無限の可能性を引き出せるよう、教育活動を充実させていきたい」

進路指導部長

井上智裕 いのうえ・ともひろ
教職歴28年。同校に赴任して12年目。「生徒に自信を持たせられる指導を常に追究していきたい」

企画推進部長

藪内章彦 やぶうち・あきひこ
教職歴28年。同校に赴任して12年目。「生徒にとって、学校にとって何が最善かを考え、教育活動を実践していきたい」

国際理学科長

林宏樹 はやし・ひろき
教職歴16年。同校に赴任して7年目。「立ち止まらず、前進していきたい」

面し、方法を考え直さなければならなくなることもあります。そうした学習に取り組みさせることで、失敗を恐れずに挑戦し、試行錯誤しながら道を切り開いていく資質・能力を身につけさせようと考えていました」

ところが、「進学実績を出さなければならぬ」という思いからか、大学入試で求められる知識・技能の習得のための教科指導に重きを置くことが最優先され、探究学習は思うように根づかなかつたという。そこで、14年度にSGHが始まると同時に、その指定を受け、学校を挙げて探究学習に力を入れることにした。

「伝統校であっても、生徒の気質や社会の変化に対応し、指導改善を続けていくことが大切です。SGHにおける探究学習を推進することで、知識・技能にとどまらない資質・能力を育成できる指導体制を確立したいと考えました」（藪内先生）

生徒発表の評価者には、「遠慮ない指摘」を依頼

14年度の探究学習は、普通科の生徒から希望者を募って行ったが、15年度に知の総合類型を新設した後は、同類型の1・2年次に週1回の科目「知の探究」を設置して探究学習に取り組んでいる（18年度に同類型は国際理学科に改編され、「知の探究」は「課題研究」と改称）。具体的には、1年次は5人1組のグループ、2年次はグループか個人で研究テーマを設定し、地

域でのフィールドワークや、連携先の大学での取材・調査・実験などに取り組む。そして、その成果を英語でポスターやスライドにまとめて12月に発表し、優秀グループ・個人を選抜。選抜されたグループ・個人は、2月に設定された学校全体の発表会で、ポスターセッションやプレゼンテーションを行う。一連の活動で大事にしているのは、生徒が失敗から学ぶ機会にすることだと、国際理学科長の林宏樹先生は語る。

「生徒には、うまくいなくても諦めず、工夫を重ねてほしいと思っています。そうした粘り強さを育成できるよう、1年次から英語での発表に取り組ませるなど、高いハードルを設定しました。また、生徒たち自身で困難を乗り越える機会を大切にしたいので、教師は課題や問題点に気づいても、可能な限り助言は我慢し、見守ることにしています」

例えば、1年次には、「貧困をなくす方法を考える」といった漠然としたテーマで研究を始めてしまうグループが少なくない。夏季休業期間には、連携先の1つである京都大学の教員や大学院生らを前に中間発表を行うが、テーマ設定に課題があるグループは、研究対象の不明確さや分析の曖昧さなどを指摘されるといふ。

「生徒の発表を聞いてもらう大学教員や大学院生には、『失敗経験を大切にしよう』というねらいを伝え、課題や問題点を感じれば遠慮なく指摘してほしいと伝えています。講師を聞いて悔し涙を流す生徒もいますが、そう

した思いをばねにして、生徒は研究テーマを練り直し、調査や分析の方法を工夫していきます」(林先生)

例えば、スタート時に「観光による地域の活性化」をテーマに取り組んでいたグループは、中間発表後、「外国人旅行者を増やし、地域振興を図る方法の研究」と、より明確なテーマを設定。最終発表では、訪日ムスリムの観光客が増加していることに着目し、「ハラル料理(＊2)」を提供している姫路市内の飲食店の地図を作成するというアイデアを提案した。

「中間発表でつまづいても立ち直り、最終的には教師の想定を超えた水準に到達するグループは珍しくありません。一見すると控えめな生徒も、負けず嫌いであることが少なくなく、悔しい思いをすると大きな力を発揮できると実感しました」(林先生)

成長する生徒の姿を見て、教師間に探究学習の意義が浸透

SGHの指定を受けた当初は、指導に戸惑う教師もいたため、指導の負担を少しでも軽くできるよう、生徒に配布するプリントや冊子の作成、連携先の大学との折衝など、取り組みに必要な業務は、企画推進部の教師が行った。しかし、現在は、探究学習の指導に前向きに取り組む教師が増え、企画推進部と学年団の教師が協働して業務を担っている。

教師の意識に変化が生じた要因としては、探

究学習を通じた生徒の成長を実感したことが大きい。例えば、国際理学科では、1年次の3月にアメリカのハーバード大学などを訪問し、各グループが研究内容のプレゼンテーションを行うが、堂々と発表し、同大学の学生からの質問にも積極的に答える生徒が多いという。

「質疑応答では、予想していなかった質問を受けることもあります。生徒はその場で答えをまとめ、懸命に返答していました。文法の誤りなどを恐れず、自分の考えを発信しようという意欲を感じました。そうした生徒の姿を目のあたりにする中で、困難に立ち向かう姿勢を身につけさせるという探究学習の意義が次第に教師間に浸透していきました。そこで、19年度からは普通科の1・2年次でも、『総合的な探究の時間』を中心に、国際理学科の『課題研究』に準じた内容で探究学習を実施しています」(藪内先生)

生徒同士で協議して評価基準を定め、発表を相互評価

国際理学科の「課題研究」における発表では、生徒間でルーブリックに基づいた相互評価を行っている。以前は教師が作成したルーブリックを用いていたが、18年度から、教育評価論などを専門とする兵庫教育大学の奥村好美准教授の協力の下、ルーブリックの作成に生徒を参画させている。

「教師が与えた評価基準が、探究学習の実

図1 「課題研究」の発表の評価基準を生徒が策定する取り組みの概要

◎目的

- 探究学習の質の向上
探究学習の実践者である生徒が評価基準を策定することで、納得できる評価を実現し、研究の質をさらに高めさせる。
- 生徒のメタ認知の促進
生徒間の議論を通して、1つの発表にも様々な評価基準があることに目を向けさせる。そして、どのような発表を行う必要があるのかを考えさせるとともに、自分の発表についての客観的な振り返りを行わせ、強みや課題への意識づけを図る。

◎生徒が評価基準を策定する場面

- ①1年次の9月
夏季休業期間に京都大学で実施した中間発表について、「課題研究のテーマの新規性と実行可能性」の観点から考察。
- ②1年次の1月
12月に実施した発表について、「発表態度」の観点から考察。
- ③2年次の7月
7月に実施した中間発表について、「テーマに対する分析方法の妥当性」の観点から考察。

*学校資料を基に編集部で作成。

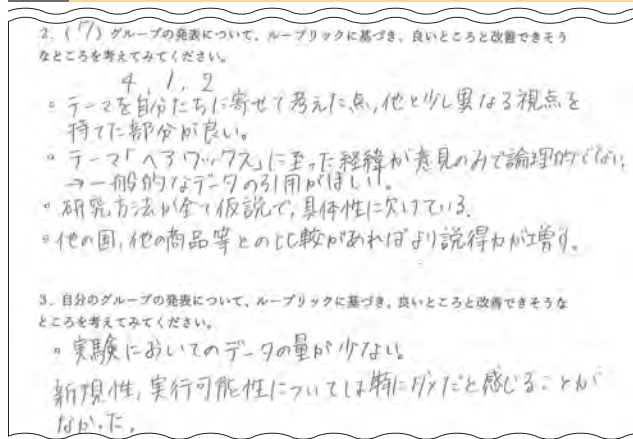
践者である生徒が理解しやすいものであるとは限りません。生徒が探究学習への意欲をさらに高められるよう、生徒の考えを評価基準に反映させていきます」(藪内先生)

生徒がルーブリックを作成する手順は、以下の通りだ。「課題研究」で設定された3回の発表について、それぞれ①課題研究のテーマの新規性と実行可能性、②発表態度、③テーマに対する分析方法の妥当性の観点から、評価基準を考察する(図1)。一度にすべてを考察することは難しいため、発表ごとに考察する観点を1

*2 イスラム教の戒律で許されている食材を用いた料理。

図2

相互評価に用いるワークシート(例)



生徒同士で評価基準を協議して作成したルーブリックを用いて、発表についての相互評価を行っている。*学校資料を基に編集部が一部改編。

つに限定した。いずれの発表でも、事前にその回で考察する観点だけを伝えておき、まず、生徒一人ひとりが自分の考えに基づいて発表を5段階で評価。次に、生徒同士で、どの発表に最良の「5」の評価をつけたのか、その理由は何かなどを協議し、統一した基準を策定していく。その際、段階ごとの評価基準が定めやすくなるよう、例えば、「5」を集めた発表と次点の評価の「4」を集めた発表の差は何であったのかから議論する。議論を通じて、「分かりやすい」「よい」といった抽象的な表現では、他者と評価基準は共有できず、振り返りの際に成長を実感しづらいことに気づき、生徒は評価基準の文言を具体化させていく。そうして自分たちで作

成したルーブリックを用いて、生徒は発表について相互評価を行っている(図2)。

「評価基準についての議論を通して、どのような発表を行う必要があるのか、生徒一人ひとりが明確に意識するようになりました。そうした中で、自分たちの発表方法の強みや課題を把握し、次回の発表に生かすなど、メタ認知を深めた生徒も少なくありません。大学に進学したり、社会に出たりした後も学び続けられるよう、自らの現状を客観的に捉え、改善を図る姿勢をしつかり身につけさせたいと考えています」(林先生)

大学進学後を見据え、今後も教育活動を充実させていきたい

SGHの指定をきっかけに強化された指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。探究学習に取り組む中で、自分の考えを堂々と述べられるようになる生徒が多いことは、前述の通りだ。

探究学習を通して社会でやりたいことを見つけ、その実現に必要な学問を学べるよう、全国の大学・学部から志望校を探するなど、進路意識も向上し、学問や進学先へのこだわりを持つ生徒が増えた。例えば、模擬試験などで思うような判定が得られなくても、第1志望の実現を目指し、粘り強く学習を続けるようになった。そうした生徒は、「一般入試だけではなく、推薦・AO入試にも視野を広げている」と、井上先生は話す。

「何をどの大学で学びたい」というところで具体化された希望進路へのこだわりが、複数の入試区分で挑戦しようとする意欲につながっているのだと感じます。また、推薦・AO入試の志望理由書などで探究学習の成果をアピールする生徒も多く、自分の研究に自信を持っていることがうかがえます」

同校のSGHの指定は18年度で終了したが、今後も、探究学習を始めとした既存の取り組みを継続するとともに、新たな取り組みを積極的に行い、国際社会で活躍できる人材の育成に力を入れていく考えだ。例えば、19年度の1・2年度の探究学習では、地域の企業の支援も受け、生徒がオーストラリアや台湾の姉妹校の生徒とグループを組んで旅行企画を立案する「トラベルプラン・コンテスト」を始めた。インターネットによるテレビ電話サービスなどを使って、同校と姉妹校の生徒が英語で企画を練り上げたり、グループごとにその内容を発表したりする機会を定期的に設定した。20年度からは、地域の他の高校にも参加を呼びかけようと計画している。

山根(みね)文(ふみ)人(ひと)校長は、今後についてこう語る。

「本校は、生徒を志望大学に送り出すだけではなく、大学進学後を見据えた教育活動を大切にしています。今後も、プレゼンテーション能力や英語力など、大学での学びに必要な資質・能力を育めるよう、取り組みを充実させていきたいと考えています」

●同校の国際理学科では、企業と連携し、探究学習をさらに充実させる取り組みの1つとして、2019年度から、「総合的な探究の時間」「課題研究」などの授業で、新たな価値を生む方法論「フォーサイト・クリエーション」を学ぶ時間を設けている。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内「マナブコラム」(<https://berd.benesse.jp/special/manabucolumn/manabinoba5.php>)で、その内容を紹介している。